

ラクゴ・ザ・フューチャー

SFの歴史第四回

第八十五回『SF教室』を読み返そう4

文・田中啓文

最近、SF大会とか京フェスとかいったSF関係のイベントはほとんどごぶさただが、それは、ちかごろ翻訳された海外SFをほとんど読んでいないため、「行ってもしゃあない」と思っているからだろう。そういうところに参加しても、ほかの参加者が「〇〇はおもろかったで」「〇〇のほうがおもしろいで」としゃべっているのを横でただ聞いているのはつまらないではないか。というわけで、今年のSF大会も参加しないのである。参加する皆さんは楽しんできてくださいね。

ところで、近頃、SFの入門書が矢継ぎ早に出版された。これはちよつとまえだが、山本弘「トンデモ本？ 違う、SFだ!」、伊藤典夫編「SFベスト201」、大森望「現代SF1500冊乱闘編」（これは今月半ばに発売）など。どれも好著だが、個人的には「SFベスト201」に掲載されている作品あたりが、一番自分がSFを読んでいたときと重なるので、懐かしい。ただし、これからSFを読もうかなと思っているひとへの入門書として適切かどうかはわからん。山本弘氏の「トンデモ本？ 違う、SFだ!」は、タイトルだけ見たら、かなり引くが、中身は著者の「SFはこんなにおもしろいんで! だまされたと思って、いっぺん読んでみて!」という熱い思いが詰まっているうえ、読物としてもおもしろい。これからSFを読もうかなと思っているひとには一番適切かも。大森さんの「現代SF1500冊乱闘編」は、まだ現物を見

ていないのでなんともいえないが、なにしろ扱っているのが一九七五〜九五と、今から十年前までの書評集なのだ。

というところで、それでは「現代SF1500冊」も扱っていない一九七一年に発売された「SF教室」を読み返す企画、そろそろ参りましょう。前回は、ジョン・キャンベルという名編集者が「アスタウンディング・サイエンス・フィクション」を舞台にして、アメリカSFの黄金時代を築いた、ということろまでだった。

「アスタウンディング」はよくもわるくも、ガーンズバックの「科学小説」的なSF観を引きずっていたので、科学知識のない作家の作品はなかなか掲載されなかったようだが、そんな作家のひとりがレイ・ブラッドベリである。ホラーやファンタジー短編を多く書いていた彼は、科学を前面に押し出すのではなく、一種のファンタジーとしてのSFを書いた。

その最たる成果が「火星年代記」である。ブラッドベリたちの活躍で、SFは「科学啓蒙小説」から脱却することができた。SFがサイエンス・フィクションの略でなく、筒井さんが本書の序文的な文章「SFとはなにか？」で書いているような「SFとはSという字とFという字のくみあわせであらわされる読みもののこと」という定義に近づいたわけである。

五十年代になると、アンソニー・バウチャーの「ファンタジー・アンド・サイエンス・フィクション」、H・L・ゴードルの「ギャラクシイ」という二冊の専門誌が創刊され、単行本もつぎつぎと発売されて、人気を博した。SFがブームになったのである。一九五三年には、SF雑誌の数は三十数種類にも及んでいたというから驚く。日本はSFブームのころでも基本的には三誌しかなかったことを思うと、三十数種類はすごいよなあ。それだけあったら作家は食うには困らないだろう。単行本に関しても、いわゆる「オールタイムベス

ト」的な名作と呼ばれる作品の多くはこのころ出版されたのだ。「SF教室」の伊藤典夫氏の文章から、このころに発売された作品のタイトルを並べてみると、

ベテランでは、

ロバート・ハインライン「人形つかい」「地球の緑の丘」

アイザック・アシモフ「鋼鉄都市」「宇宙気流」

レイ・ブラッドベリ「火星年代記」「刺青の男」「華氏451度」

シオドア・スタージェン「人間以上」「夢見る宝石」

ヴァン・ヴォクト「宇宙船ビーグル号の冒険」

フレドリック・ブラウン「発狂した宇宙」「天使と宇宙船」

ハル・クレメント「重力の使命」

新人では（このひとたちが「新人」というのもすごいが）、

フレデリック・ポール&C・M・コーンブルース「宇宙商人」

アルフレッド・ベスター「破壊された男」

エドガー・パングボーン「観察者の鏡」

ロバート・シェクリイ「人間の手がまだ触れない」

ポール・アンダースン「脳波」

イギリス作家では、

ジョン・ウインダム「トリフィドの日」「海魔めざめる」

アイサー・C・クライク「幼年期の終わり」「銀河帝国の崩壊」

J・T・マッキントッシュ「300…1」

となっている。皆さんはこのなかでどれぐらい読んでますか。何？一冊も読んでない？うーん、たしかにどれも五十年もまえに書かれた作品であって、いろいろ古くさくなっている部分もあるだろうが、「SF小説」としてのおもしろさは今読んでもまったく問題ない……と思うけどなあ。そういうおまえは全部読んだのかって？はいはい読みましたよ。それも小学校五、六年から中学生にかけての思春期に、ほとんど義務のように読んだのである。つまり、当時入手可能な

った唯一の入門書である、この「SF教室」に掲載されている本は、おもしろいおもしろくない好みである好みでないにかかわらず、ぜーんぶ読むことに決めていたのだ。でも、そういう「自分を縛る」ような読書体験が、人生のある時期には必要なのではないでしょうか。

故中島らもは、「小説家になりたいなら、人生のある時期に、目がつぶれるほど本を読んだ経験がなくてはならない」というような意味のことを書いていたと思うが、まったくそのとおりだと思う。若いころから、

「おもしろくない本は読みたくない」

「おもしろくない本は無意味・無価値」

「わけのわからない本も無価値」

「こっちはお金を払ってるんだから、誰が読んでもちゃんと内容がわかっておもしろい本でないとだめ」

みたいな価値観を持つのはいかなものか。何をおもしろいと思うかは、読み手の年齢や理解力によってかわっていくものだし、若いうちは、少々、いや、かなり背伸びして、わけがわからないものもガンガン読んでいくべきではないか。そのとき、

「なーんや、これ、わけわからん。しょうもない」

といきなり決めつけるのではなく、

「わけわからんけど、もしかしたらおもしろいのかも。作品が悪いのではなく、こちらの理解力が足りないのかも」

と考えるのもけっしてまちがった姿勢ではない。しかし最近、小説にかぎらず、音楽でもなんでも、

「おもしろくない＝悪い作品」

「理解できない＝悪い作品」

と、いきなり断を下すような書評、音楽評が多くて悲しい。わけがわからないものを「わけがわからんなあ。むちゃくちゃ



ややなあ。けど、なーんかありそうやなあ」と思うような、一種のゆとりというか遊び心は、つねにキープしておきたいもんです。ちよつとずつ背伸びしていくことで、読書の幅も広がるし、新しい世界とも出会えるんじゃないでしょうか。

えーと、余談に入りすぎたが、そういうような作品がどんどん出版されたのである。繰り返しになるが、どれも、今読んでもおもしろい。マッキントッシュの「300・1」なんかは、このなかではちよつとばかり入手困難かもしれないが、たしか、地球滅亡が迫っているとき、脱出用のロケットの数が少なく、全市民を乗せることができない。乗船できる、つまり、生き残ることができるのはほんの一握りで、その割合が三百人に一人なのである……というような話だったと思う。なかなかドラマチックそうでしょ？ 図書館などで探して、ぜひ読んでみてください。

もちろん、これだけ雑誌が乱立し、単行本も続々発売されると、作品の質はどんどん落ちていくのはあたりまえ。あつというまにブームは去り、雑誌は五、六誌に減った（それでも多いように思うが）。

だが、アメリカでのS Fブームは世界中に影響を及ぼし、日本やイギリス、ドイツ、フランス、ソ連、ポーランド……などでもS Fを専門的に書く作家たちがあらわれた。

本家であるアメリカでも、ブームは去ったものの、フィリップ・K・ディック、ジェイムズ・ブリッシュ、フィリップ・ホセ・ファーマー、ハリー・ハリスン……といった新人（！）作家たちが傑作を発表していたし、イギリスでもすぐれた才能が育っていた。

このままいけば、S Fという文学の将来は、まあ安泰だろう、と誰もが思っていた。何もかわらず、このままずっと成熟していけばいいのだ。

だが、そういう「安定期」こそが危ないのである。ジャンルとしての衰退、「伝統芸能化」がはじまっているのである。こういう展開って、なんとなくちょうど同じ時期のモダンジャズを思わせるなあ。一九五〇年代のジャズは、ハードバップとかファンキージャズとかいって、きら星のようなスタープレイヤーたちが、ブルーノートレーベルを中心に、傑作、佳作、名作を連発しており、ファンはつぎつぎと発売される新譜を追っていた。ジャズという音楽の将来は安泰だと思われるていたが、そこに落とし穴があったのである。

というあたりで今回は終わり。次回は、今となっては懐かしい、S F界を襲った「ニューウェイヴ」の衝撃を、モダンジャズ史における「フリージャズ」の登場とからめてご紹介したいと思います。乞うご期待。